

日本作文の会編

日本の 子どもの詩

奈良



日本作文の会 編

日本の 子どもの詩

奈良

岩崎書店

日本作文の会

日本の子どもの詩 29

岩崎書店 昭56

110 p 21cm

内容：29 奈良

〔分〕 911

日本の子どもの詩 29 奈良

一九八一年八月二五日 初版発行

編者 日本作文の会

発行者 森山甲雄

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二
電話〇三―八二―九二三(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ぜんたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもたちの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などともよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいとなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくりだした芸術（現代の子どもの「わらべうた」）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「奈良編」であります。どうぞ、ひとつひとついいねいにお読みください。

もくじ



1918
~
1945

8

山やき

みかん

夕日

夕ぐれ

9

何やら

こんにゃく玉

でっちに行く

提燈

10

晴れた日

赤とんぼ

雨

煙

11

雨あがり

けんか

(無題)

石垣

12

ひこうき

(無題)

13

節分の豆

日ぐれがた

霧

14

麦運び

学校の帰り道

15

足音

16

かえる

(無題)

午前

17

午後

月

はいしゃへ行く道

18

犬

冬

学校へいく道

19

桜のつゆ

春の昼のこと

20

あまがえる

しゃしん

21

秋の空

製作

22

ゴムマリ

お米洗い

法隆寺

冬



1945
～
1959

- 24 ゆめ
ぶらんこ
せんせい
ろうか
25 ぼくたちの村
山へいったこと
天皇へいか
26 なくなつたお父さん
つつじ
27 びんぼう百しょう
世界のうら
28 田やすみ
くさとり
29 よまわり
雨のあとの川の水
よふけ
30 大仏さま
31 あめ
にわとり
32 かめ
若葉

- 33 木もれ日
よしの川のゆうやけ
きんぎょ
ゆりの花
34 日どり
にじ
35 にいさん
トインビー博士
大かぜ
36 ふねのしずんだこと
ほうせんか
夜
37 夜まわり
お父ちゃん
だいこんひき
38 牛
肩たたき
39 勤労感謝の日
牛を売る夕方
ともだち
40 水道工夫のおじさん
牛
41 かんじょう
おふろ
42 一ばんぶろ
しんぱい

43 まりちゃん かなんやう

永友さんのおばちゃん

44 思ったこと

栄山寺

45 帰り道

わらをうつ音

46 お金がない

戦争

47 十五頭の犬

冬

48 なんといいのにか

働きに行く牛



1960
～
1969

50 もう二年やろ

あしたはどうぶつえんへ えんそく

ひみつ

51 はたけのおじいちゃん

うわなべ古墳

52 土くだき

53 わたしたちの町

村の電灯

54 たなばたまつり

55 いもうと

はこつくり

のこぎりのめたて

56 運動場

大雨

バスの中

57 らくがき

沖縄へ五万円で

貝がら

58 ひぐらし

星

蛾

60 くさかり

おふろ

月の夜

61 てんへいったちせ子ちゃん

東大寺転害門

62 風

すいしゃごや

山

63 大こんあらい

おち葉

母

64 牛の子をうられたこと

たいの内職

65 月きゅう日

66

かきの実

ミシン

67

かたたたき

68

おかあさん

69

平凡でも

70

車の音

71

父

72

とんど

73

おかあさんの手

74

せつぶん

75

はこべ

76

平

77

火の瞳



1970

～

78

にわとり

79

せんせい

80

おべんとう

81

すみれ

82

すずらんの花

83

牛

84

芽

85

つくしごはん

86

先生とカメラ

水たまり

87

ひりょうはこび

88

田植え

89

私が家に帰ると

90

鉄棒にぶらさがって

91

ブルドーザー

92

きん植え

93

せんたく

94

雨のしずく

95

草運び

96

おとうさん

97

茶畑

98

夕日

99

バッタ

100

母のあせ

101

からだ

102

草持ち

103

柏木北池

104

思い出の一本松

105

へび

106

ノン

107

すすき

108

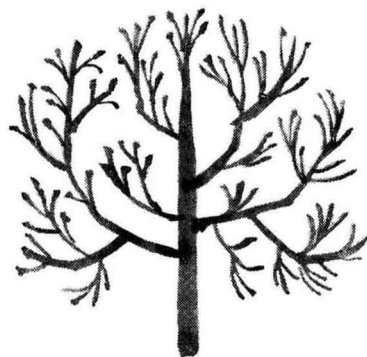
東生駒の秋

109

だれかいないかなあ

110

おふろ



1918～1945

(大正7年)

(昭和20年)

ここからあとのページには

* 日本で子どもたちが、詩をかく
ようになりはじめたころ。

* 奈良県の児童詩がしずかにしず
かに育っていたころ。

* たくさん子どもたちが、ぐん
ぐんかきはじめたのに、戦争の
ために、それがおとろえてしま
ったころ。

こんなころの奈良県の子の詩が
ならんでいる。

山やき

木下誠之 小2

わかくさ山の山やきに、
人はたいまつで焼きはらう。
赤い火が青い煙を出していく。
しかけ花火の玉あがり
手玉のようにおもしろや。

奈良女子師範附属校

みかん

鈴木清 小4

みかんみかんと
みかん屋の小僧が、
みかんを売りに来た。
うしろ見たら密柑が
一つころげ落ちた。
一つ拾ったらまた一つ
ころげ落ちた。

宇陀郡神末校

夕日

松山実子 小5

夕方、
高い高い青空に、
夕日がたまる。
さみしいな。

宇陀郡桃俣校(指導)森窪君三

夕ぐれ

松島絢子 小5

菊のそばで、
わたしがただ一人、
石にもたれながら、
淋しく菊を眺めて、
割算の九九の声。

宇陀郡桃俣校(指導)森窪君三

何やら

種村つぎえ 小6

道に小さな何やらが
青く小さく照っている。

すかんぼの葉に
露^{つゆ}呼んでゐる。

宇陀郡桃侯校(指導)森窪君三

こんにやく玉

田中たきえ 小6

ぬくい日、

母さんむかえにいった。
道ばたにころがった

こんにやく玉。

母さんのいうのには、
母さんのいうのには、

死んだ弟の顔に似^にてる、
拾^{ひろ}つて涙^{なみだ}こぼしている。

宇陀郡桃侯校(指導)森窪君三

9

でっちに行く

西谷清一 小6

弟、さようなら、
僕は遠^{ほく}いところへ、
でっちに行くのだ。

弟は悲しげに

すりよせてくる、

弟がかわいそうでたまらん。

おお弟よ、弟よ、

私のたよりはお前ばかりだ。

弟よ、さようなら。

宇陀郡桃侯校(指導)森窪君三

提燈^{ちようちん}

森口登久三 高2

提燈動かずに
大きくなる、
一本道だ。

磯城郡式下校

晴れた日

玉置美代子 小4

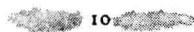
晴れた日、
畑のふちにいちごのにおいが、
たまっていた。
学校がえりだったが、
かえりにくかった。

北葛城郡高田女子校

赤とんぼ

新子キヌヨ 小4

秋の小川は すんでいる
赤とんぼ
しっぽを つけては とび
つけては とびしている



雨

萩下利男 小4

雨のふる日に
製鉄所の前を通ったら、
粉のにおいがした。

南葛城郡朝町校

煙

泉本山次 小6

火をたいている
お母さんの足もとに、
煙が城をかこむように
取りまいている。

吉野郡瀧門校(指導)桜井義夫



雨あがり

吉村 綾 小 2

雨が上った

向うの山かすんでいる

麦みんな

大きくせのびした

北葛城郡乳孔校(指導)中川静村

けんか

南茂子 小 5

けんかをして 帰る道

坂の上まで 行った時

ひよっと 後ろを見たら

その子も こちらを見ていた



(無題)

大野タカシ 小 1

ボクハ

スナデ山ヲツクツテイタラ

アタマニ雨ガ カカッタ

ウチヘ入ッテ

ニワヲ

ヒトリ見テイルト

ウラノ大キナ青イハニ

雨ガ ポツリト

音ヲタテテイタ

高市郡飛鳥校

石垣

松井スミエ 小 3

遠く見る石垣

まるで魚のうろこみたい

のびて行く

柿の木が

ゆれるたびに

うろこが

かげになったり

ひかったりする

北葛城郡箸尾校(指導)岡本

ひこうき

学校かえり

野原のかどまで来たら

ひこうきが五台で

空中戦をしている。

一だいがぐんぐんおいかけた

おいかけられたひこうきは

グルグルまわって落ちていったが

ひよいと止った。

ぼくはドキンとした。

「こんな日がほんとうに来ますよ。」

と、先生が言われたのを

思いだした。

高市郡敵傍北校

北株孝雄 小3

(無題)

つばめが三ば

でんしんばしらに止っていた

何かちびちび話していた

なかよく遊ぼといっているのかな

池田マス 小2

高市郡飛鳥校

節分の豆

黒いのも、白いのも、

茶色いものも、

おばあさんに紙に

つつんでもらった。

外から帰ってきた弟が

「やあ、おんの豆、とつとんがん。」

とんで来て

つめで紙をひっかいた。

仲西芳夫 小3

豆がぼろぼろ落ちた。

「たかちゃん、おんの豆、とんなやい。」

「ひろたれ、ひろたれ。」

弟はぼくよりよいけい豆をひろって

(新戸) なんだの方へ逃げて行つた。

弟はどもしやない奴だ。

ぼくより早く走ると思つて

すぐ逃げる

どもしやない奴だ。

ぼくは落ちた豆を一つずつ

ていねいに土をふいて拾つた。

山辺郡前栽校(指導)森村茂

日ぐれがた

米川三郎 小4

泣きやまない弟をおぶつて

ねんねこと歌うたいながら

山の竹がまがつている

下をとおりこし、

はしのところで、

おかあさんのかえりを
迎むかえにきたのだ。

「弟、なきやめ」といって、

夕日にてらされながら

歩いていた。

竹の折れた林を

通つていくと、

町かどまでついた。

弟はいつのまに泣きやんだのか

「ひひん」と笑つた。

向うで でんきが

にぎやかに きえたり とぼつたり、

お母さんの かえつてくるのが見えた。

高市郡飛鳥校

霧きり

霧だ。

あたりの家々は、

(氏名不詳)

小4

りんかくだけが
うっすらとみえている。
その中を
するどい汽笛きてきの音が、
東の方へ
のびていった。

北葛城郡五位堂校

麦運び

夕ぐれ

近所の麦運び手伝った。
ぼくは麦運びは初めてだ。
麦を肩の上へせおうと
は先が重く後へたれる
からだがかげそうだ。
麦を運ぶたびに
汗ばんだ首すじにほがすれて
くしゃくしゃする。
でこぼこの多いたんぼ道は歩きにくい。

吉田和夫 小4

14

支那しなで戦いくさっていられる
ここの家のお父さんたちは
もつと悪い道を
もつと重い物せおって
どんどん進軍していられるのだ。
つかれた足をひきずって
だまって麦を運ぶ。

歌をうたいながら
野道を歩く人のかげが
かわききつた土の上に長くうつる。

風もない

むしあつい夕ぐれだ。

生駒郡都跡校
支那しな＝古い中国の国名 秦しんのなまつたもの。

学校の帰り道

東中次夫 小4

ひゆうと寒い風が吹いてくる
「学校すんだら、早く帰れよ」
といった父の言葉を思い出して
急いで走った